

(3) 討論「『新庄地震学』にみる地域と連携した防災教育とその継続」

パネリスト 川口 幸三 (新庄公民館 館長)
谷本 明 (新庄中学校 教諭)
榎谷 節生 (衣笠中学校 教諭)
小川 正 (石川県輪島中学校 校長)
金井 昌信 (群馬大学)
コーディネーター 川東 英治 (群馬大学 協力研究員)

以下略



川東 新庄中学校の生徒の皆さんから、新庄地震学でこれまでどんなことをやってきて、これからどんなことをするのかという話をいただきました。そのあと谷本先生から、地域の連携した防災教育とその継続という観点で、新庄地震学の内容を具体的に、また先生側からどのような視点でおこなってきたのかということも含めて話していただきました。話を聞いて皆さんお気づきかと思いますが、15年するとこれだけいろいろなことをやってきているのかと感じたかと思います。それだけの積み上げがあつて、今日に至っているということです。谷本先生の話にありましたように、新庄地震学は15年目になり、一期生は地域を担う存在になってきているという継続の力というものも感じられたのではないかと思います。「『新庄地震学』にみる地域と連携した防災教育とその継続」とありますが、この中にいくつかテーマがあります。一つは15年間継続してきたという効果、継続するためにはどうしたら良いかという仕組みづくりという視点です。もう一つは地域と連携するきっかけや、学校と地域の双方が連携するメリットなどを含め、地域と連携するにはどうしたら良いかという視点です。さらに、連携をしていくことにより、防災教育が防災教育の本質的な効果をこえて、教育そのものに迫る本質的な効果があるのではないかとこのことを中心に討論を進めていきたいと思います。

川口 田辺市新庄公民館の川口と申します。私は公民館長になって5年目を迎えます。ちょうど新庄地震学の転機をむかえたときなのでしょうか。5年前に田辺市共育コミュニティ運動というのがあり、国・県・市の指定を受けました。その一つに新庄中学校と新庄公民館がタイアップして地域づくりをする、地域で寄ってたかって子どもを見守る運動が始まりました。そのあたりから学校と地域が相当うまくいきましたと伺っています。新庄のことを申し上げますと、新庄地区はおよそ人口6千人、一つの幼稚園、一つの保育所、二つの小学校、一つの中学校という

地域です。九つの町内会からなっており、相当広い地域です。中学校の校区と公民館の館区がまったく同じ地域でもあります。

谷本 先ほど発表させていただきましたが、防災担当になってまだ3年目です。私自身、新庄中学校に異動してくる前は京都市の学校に赴任していて、5年前に戻ってきました。京都では防災教育という言葉すら聞いたことがなく、震災があった4月に新庄中学校に着任したのですが、「新庄中学校は防災教育をやっている」ということで、何もわからないまま榎谷先生に教えてもらいながらやっていました。そして2年前にいきなり担当となりました。まだ新米なので私自身わかっていないことも多いと思います。今回、いろいろな学校の先生が集まっておりますので、いろいろな取り組みを勉強させていただきたいと思っています。

榎谷 衣笠中学校の榎谷です。3年目になります。前任校の新庄中学校には11年間おりました。先ほどから新庄中学校の生徒だったり、谷本先生が発表してくれて、良い話ばかりだったので、失敗談も話したいと思います。三つほどさせていただきます。11年も経つと、いろんな成功事例もあれば失敗事例もあります。一つは水道水が止まったら水が飲めないということで、ある理科の先生が10のペットボトルを裏返して、この中に石や小石や砂、木の葉っぱや根っこをたくさん詰め込んで、これを飲めるかどうか実験をしました。近くを流れている川の油が浮いたような水を入れて生徒に飲ませました。生徒は口を近づけて「飲めない」と言うので、先生が「なんでだ」と聞くと「油の匂いがする」ということで失敗しました。もう一つはあるグループが避難場所まで走ったら何分で着けるかということをやりました。ただ、背中にリュックを背負い、中に20のペットボトルに水を入れたものを10本ほど入れまして走りました。5分したらリュックの底が抜けました。もう一つは先ほど紹介していた宿泊体験のことです。参加者のほとんどは男子なのですが、ある学年で3名の女子がやりたいと手を挙げました。また体育館ではなく、テントを張って、自分たちで飯盒炊飯したいとのことでした。その年は教師3人ほど、横で女性の先生2人にも来てもらい、一緒にやってもらった記憶があります。男子ですと一人の先生と一緒に横に寝ていれば安心なんですけれど、女子でしたので気をつけました。そういったいろいろなことを繰り返しながら、やってきています。いまは新しい学校に変わりましたが、防災を広めていきたいと考えております。

小川 石川県の能登半島の輪島からまいりました。東日本大震災の年の4月に、校長として小木中学校に赴任しました。その当時の小木中学校は石川県内の3本の指に入る生徒指導困難校と言わ



川口 幸三さん



榎谷 節生先生



小川 正先生

れていました。現在赴任した学校は、輪島市内の学校ですが、3校再編しまして新しく輪島中学校となりました。ここもかつて3本の指の一つに入る生徒指導困難校です。そういった中で、小木中学校に赴任したときに、学校の高台から見渡したら、湾の中に集落がある、東北のリアス式の海岸とまったく同じような風景が広がっている。そこで、防災についての取り組みをやらうと思った矢先に、片田先生が番組で釜石のときの様子を話されました。講演会でいろいろ話を聞く中で、「これはひょっとして」という何かピンときたものがありました。それから片田先生を追いかけながら、本校でも取り組んでいきたいなという流れで始めました。すでに異動してしまっていますが、昨年、小木中学校はぼうさい甲子園で奨励賞をもらいました。グランプリが新庄中学校です。先ほどの発表を聞いて、「なるほど、新庄中学校がグランプリをとる理由がここにあるのか」と思いました。やっていた内容はまったく知らなかったのですが、小木中学校が取り組んできたことと、ダブるところがほとんどです。それをバージョンアップしたものが、新庄中学校です。さすが15年の伝統校です。小木中学校が取り組んできたのは3年～5年です。新庄中学校と小木中学校・能登中学校と交流させていただきたいなという気持ちを持ちながら、勉強させていただきたいと思います。

川東 それでは討論に入っていきたいと思います。まずは、多くの皆さんが「15年もよく続いたな」と感じられたかと思います。最初に榊谷先生にそのあたりを率直に伺いたいと思います。15年も新庄地震学を継続することができた理由は何なのか。また、続けようという意識で何か続けるために注意した点等ありましたらお話しください。

榊谷 私が新庄中学校に赴任したときは、地震学は第二期目でした。第一期目というのは、実は総合学習の試行があり、新庄中学校がその試行を受けまして、地域の課題は何かないかということになりました。当時、元市会議員で新庄公民館館長だった柏木さんが小学校で津波の語り部をしていました。そういったことで、地域の課題として津波災害を取り上げ、総合学習では津波の災害について学ぶこととなりました。私はその学習の2年目に赴任したときには、選択教科の一つとして週に1時間のカリキュラムに取り入れられていたのが始まりです。正直、それまでは防災の“ぼ”の字も知りませんでした。他の学校で生徒指導を5年ほどやっていましたが、正直こんなにしないといけないのかと思いました。主に3年生がやるので、2年間見させてもらって3年生になったら、がんばってやろうということでした。今は、あんなに立派ですが、最初の1年目2年目は、率直に言いますと、悪く言えば学習発表会みたいな感じでした。自分たちで地震や津波について調べたことを発表するという感じでやっていたかと思います。

たまたま大きな転機があったのが、私が1.2.3年生と受けもった学年が3年生になるときに、当時の市長さんから「防災教育チャレンジプランという取り組みの第一回で募集しているので、田辺市でこういう学校はないのか」という問い合わせがあると、教育委員会から学校へ連絡がありました。ちょうど発表の時期が3年生の入試の時期にかぶるときだったので、一度はできませんと断りました。しかし、再度依頼がきまして受けることになりました。いま、9教科ありますけれども、当時は8教科でした。音楽はありませんでした。「音楽と防災、何が関係あるの？」という考えもありまして、8教科でやっていました。その後いろいろ先生方と話していく中で、「なぜ音楽をいれないのか」という注文がつかまして、音楽を取り入れました。最初は歌を歌ったり、癒しの効果で、という意味でということでした。こうして9教科やりまし

て、その結果、防災教育チャレンジプランで大賞をいただきました。新庄地震学が外部の機関ではじめて賞をもらいました。

それから大きく流れが変わりました。やっぱり外へ出て行かないとダメだということです。もちろん小学校や幼稚園に出て行こう、情報を発信しようということもやりました。毎年3年生で卒業しますので、次の3年生では何をするのか、同じことをしては、子どもたちは飽きてしまいますので、新しいネタを求めていきました。私はそれから年1回か2回東京へ行き、いろいろな会で名刺交換もして、ネタをもらってきたりしていました。例えば、かまどベンチは滋賀県の彦根工業高校の作品です。先ほどの171ダンスも東京のNPOの団体の作品です。自分が3年生の受けもちを外れたら、違う学年に「こんなネタがありますよ」「このなつくってくださいよ」とやってきました。いろんな外の機関に出て行って情報を調べるということも大事なかなというふうに思いました。

そしていちばん思ったのは、子どもたちが楽しく取り組まないと続かない。どうしても、津波の映像を見せて怖いというような授業だともちませんから、子どもたちが主体的に取り組んで楽しくできること、逆にいえば、教師も楽しんでできます。そして、先ほどもありましたけれど、地震学には指導案はありません。一切ありません。年間計画は作りますけれど、指導案はなくて、グループの子どもたちと担当の先生との相談でやることを決めていきます。もちろん、大きな方向はありますけれど、そういうかたちで子どもたちが主体的になって楽しんでやるというのが特徴だと思います。そういったかたちで11年間私が関わってきました。

川東 いまのお話の中で、きっかけとしては防災教育チャレンジプランで賞をとったということで、その中で教科数も8~9教科のほぼすべての教科で担当するということでした。さらに継続していくには、生徒の興味を持たせるという部分で新しいネタづくりをしたり、生徒も教師も楽しく防災教育をやっていくという視点が継続に大きく関わってくるのではないかという話をいただきました。

谷本先生にお伺いしたいのですが、榊谷先生が11年ほどされていた活動を引き継ぐことになって、現在感じているメリットや課題等ありましたらお話しください。

谷本 メリットは、土台をしっかりつくってくれていたことです。11年間続けてきていましたので、そのときの下級生もどういうことをやるか知っていましたし、1年間通して、どういう流れですすめていくのかを榊谷先生がつくってくれていました。例えば地震学の中でも、毎年同じテーマというものもあります。カレンダーづくりや歌、171の災害用伝言ダイヤルのダンスにプラスして自分たちで替え歌をつくるという取り組みは毎年やっています。防災標語やカルタ、小学校幼稚園への出前授業も毎年取り組んでいるテーマになっています。ある程度内容がかたまっているテーマがありましたので、そういった部分では引き継ぎに混乱はなかったように思います。宮城県に行ったり、東京へ行ったりして交流させてもらう機会も榊谷先生が人脈をつくってくれて、土台をつくってくれていたから自分たちも呼んでもらえました。引き継ぐときには、榊谷先生に東京へ一緒に連れて行ってもらいまして紹介してもらい、そこから私に引き継がせてもらいました。そういった意味で、本当に榊谷先生が大きな物腰でいてくれたのが大きいんじゃないかなと思います。

難しかった面は、これもたくさんありますが、一つは榊谷先生自身が結構一人でやっていた部分が大きくありましたので、抜けられると他の人が誰もわかっていないことが多かったです。

防災担当を一人でやっていくと、他の先生が代わったときにつながりがなくなってしまうことも多いと思います。そのことから防災担当を各学年から一人ずつだすことも始めました。あとは、生徒たち自身が慣れてしまって「自分たちはグランプリもらったんだ」とまではなっていないと思いますが、「防災ってこんな感じだろう」という様子で、パネルディスカッション 1 での議論にあったように、「本当にそこまで考えられているのか」、「命と向き合っているのか」というのは課題です。私自身もそうなんですけれど、「ダンス踊っておけばいいのでは」というように、「もうこれでいいのではないか」という意識がどこかにあるんじゃないかなと思います。ですので、私を含め自分たちは実際に体験していないので、本当に震災の怖さもわかっていないので、慣れてしまうという怖さがあると思います。

金井 谷本先生のおっしゃっていたように、担当者に一人強力な方がいると、確かにその方がいる期間は進むとよく聞きます。しかし、何年か経って、「あの学校どうなったかな」と思うと、「担当者が異動してしまって、何も知りません」ということはたくさんある事例です。新庄中学校がそうならずに続いたのは、榎谷先生が 11 年も居続けられたことが、大きかったと思います。そう考えると、田辺市教育委員会よくやったのかなという気もします。それはさておき、新庄中学校のお話を聞いていて、長く続いた理由を客観的に考えてみると、かなりきっちりとした仕組みが出来上がっていることがありますよね。「1 年生でこれやって、2 年生でこれやって、最後 3 年生には、教科に全部割り振って週に 1 回必ずやる」というかなりしっかりした仕組みが出来上がっているのは続けるうえで一番重要なんだなと思いました。ただ、きっちりした仕組みをつくと、先生方すごくまじめなので次に求めるのは、きっちりした効果や成果を求めたくなるんですよね。そうすると、「去年ここまでのことをやれたんだから、今年はもっと良いことやろう」「もっと良いことできたんだから、もっともっと良いことやろう」と。実施される先生方がどんどんハードルを勝手に高くして行って、そのうち苦しくなって、厳しくなって、アップアップになってしまうという悪循環に入ってしまう。そこを新庄中学校は、良い意味ですごく割り切っているなという感じがしました。それは、狭い意味での防災教育としての効果を重視していないという言い方をしてもいいのかもしれない。“防災に携わる活動を通じて、人間力を高める”といいますが、知識が広がるだけではなく、“そういう活動を通じて人のために役に立つ”など、そういう防災とは別のところでの効果にも目を広げて考えると大きな成果をあげられている。“防災上”という狭い範囲だけで効果を追求して、先生方があれやこれやと手をいれなくて、生徒が主体的にやりたいことを自由にテーマを決める部分を残しているというのは、ある意味割り切りがいいと思います。それがマンネリせず、続けられていることにもつながっていたのかなって聞いていて思いました。

川東 まさにおっしゃっていただいたとおり、新庄中学校では榎谷先生が仕組みという部分でかなりのことをされてこられたこと、これがやはり継続の一つの重要なポイントになっているのかなと思います。さらにそのうえで、改善できるところは改善する。一方でそうではなくて、ちゃんと続けていくという部分もしっかり割り切ったうえで続けて来られたのかなと思います。

ここからは地域との連携という部分で、川口館長にお伺いしたいことがあります。こういったかたちで新庄中学校では、今年で新庄地震学が 15 年目に入っています。館長が来られる少し前から地域との連携がより高まってきたという話がありました。地域が学校と連携することは、ここにいる皆さんが大事だと思っていらっしゃると思うのですが、実際に地域の側から見

て、学校と連携することの地域側のメリットというのはどういったことがあるのかお伺いしたいです。

川口 メリットはいろいろあるかとは思いますが、まず中学生たちが地域に出てきてくれますから地域が賑やかになります。新庄地区というのは、何回も津波に襲われている地域です。そういう地域なので、住んでいる人はそれなりに鋭い感覚をもっていたりするんです。しかし、やっぱり長い時間過ごしているうちにその感覚や危機感が薄れてきてしまいます。風化していきます。それを少しでも防いでくれるのが、年に一回行っている新庄地震学の発表会です。これには結構な数の地域の方々が楽しみに来ています。その中で避難訓練をしたり、劇を見たり、171の歌を聞いたりします。個人的になんですが、この171は非常にびっくりしました。この仕事に就くまで全然別の仕事をしていまして、公民館長になって初めて新庄地震学を見たときに171の歌を壇上で女の子たちが踊っているんですね。その壇上の下で武骨な男の子が並んで、一生懸命171とやりながら真剣になって踊っているんです。思春期の恥ずかしがりな子どもたちが、一生懸命にやっているのを見て、すごい驚きました。実は171という災害伝言ダイヤルの歌はそれまで知らなかったんですが、それでいっぺんに覚えました。きっと、地域の人もそういう刺激を毎回受けているんだなと思っています。

川東 地域に児童、生徒が入ってくることによって、地域が元気になると賑やかになる、さらに一生懸命子どもたちが伝えている姿が、大人にも伝わるということなのかと思います。

谷本先生にお伺いしたいのですが、生徒たちはなんでそんなに真剣にできるのでしょうか。

谷本 1年生で入ったときから先輩たちの姿を見ているんです。自分たちが憧れている先輩が踊っているんです。じゃあ、自分たちの番になったらやるものだなと、それが伝統というか、それをやるのがカッコいいというふうに感じている部分もあるんじゃないかなと思います。

川東 継続していることで、あまり恥ずかしがらずに、この地域で行うべきことということで身につけているということでしょうか。

地域との連携という部分で榎谷先生にお伺いしたいのですが、地域との連携は、当初はそれほどでもなかったとのことですが、地域と深く連携していくきっかけや、地域との連携での学校側のメリットについてはどうですか。

榎谷 地域との連携ですが、最初の方はほとんどなかったです。幼稚園、小学校で出前授業をする程度でした。少しずつ地域に出て行く中で、いろんな方を招いて話を聞いたり、語り部のDVDをつくったり、少しずつしていきました。一つ大きな転機を迎えたのが東日本大震災です。その頃から注目度が高まってきました。中学校から発信することについては、地域の方も耳を傾けるようになりました。私は担当していたので、正直に本音を言わせてもらおうと、それまでは「子どもたちがこうやって頑張っているのに、なぜ地域の反応が低いのか」という思いもありました。しかし、東日本大震災後については、手のひらを反したように変わったのを覚えています。新庄地域のコミュニティで公民館を窓口にして、地域と連携するというかたちが見えてきたと感じています。そういう中で子どもたちは、学校では見せない顔を大人の方たちに見せるようになりました。喋らない子が大人の方と一生懸命喋って、何とかわかってもらおうと説明している姿も見られました。生徒たちも「地域のためにやっているんだ」と胸を張れる、なかなか生徒にとって胸を張れるということはありません。自分たちのやっていることが地域のためになっているんだということを、子どもたちなりにわかっているのかと思います。ですの

で、いま思い返してみると、地域に出ることでいろいろと返ってきたことがあったかと思いません。子どもたちの方から、「こんなことを地域に行ってやりたいんだ」とか、「こんなことをやっているなんて場所を訪問したいんだ」とか、いろんなことが出てきました。東日本大震災前は「高齢者のおうちどこですか」と聞くことは、個人情報の問題もあり聞けなかったのですが、東日本大震災後には、老人会と相談した結果、許可がとれましたので、お宅に訪問して安否札等を配った覚えがあります。それもすべて子どもたちが説明してまわってくれました。

川東 川口館長のお話で地域としても、学校と協力することには非常にメリットがある。一方で、学校は学校側で、地域と協力することによって、地域に出向くことによって、子どもたちが学校では見せない顔を見せる、そこから新たなつながりが生まれる。学校・地域と連携することで、単に防災教育を行うということを超える効果があるのではないかという話を伺えました。

小川先生は小木中学校にいらっしゃった当時から、片田先生の防災を追いかけて、地域と学校が連携してやることで地域をどんどん変えていく、生徒をどんどん変えていくというところを念頭に置きながら、防災教育を始められたかと思えます。そういった視点で、地域と学校が連携するメリットという点で何かございましたらお願いします。

小川 ほとんど新庄中学校の先生方がお話してくださったんですが、私の地域は、逆に地域が防災に関する意識というのが本当に低い。災害もほとんど遭っていない。そういうところでまったくゼロからのスタート。そして最初は、私は防災教育とは考えませんでした。“防災への取り組み”という程度の意識から始めました。防災の取り組みをするには、最初から学校だけでは無理だろうと、逃げる時は学校も地域も小学校も中学校もみんな一緒だから、『避難訓練＝地域と一緒にやる』にはどうしたら良いか。そこが最初のスタートでした。約 2,000 人の地区なんですけど、いろんなことを進めていくと、当時の公民館長や町内会 23 町会が、「学校が頑張ってくれるなら応援するぞ」という感覚です。言い方を変えると、「学校頼み」、その代わり邪魔はしないし、応援はしてくれる。だったら逆に学校が思いきって、最初からその方々と一緒にやっていこうという発想でやってきました。その内容は新庄中学校とほとんど同じです。

皆さんのところは町内会に自主防災組織ってありますか？実は 23 町会に自主防災組織はまったくなかったんです。立ち上げるようにはたらきかけたら、役場の方から「自主防災組織はない」、区長さんも「無理だ」「学校で何とかしてくれ」と言われたので、学校が本部となって、23 町会一斉に自主防災組織の連合体みたいにして立ち上げました。事務局の中に生徒会もいれています。自主防災組織の中に、最初から小学校の児童会と中学校の生徒会を大人と対等の位置に加えてもらいました。小木の場合は、そこから学校と地域が一体となって自主防災活動に取り組むようになりました。そのような中で、2 年目あたりから少し意識が変わってきました。

金井 いまの小川先生の話を知ると、地域によって全然アプローチは違うんだなと感じます。いまみたいに、地域の方は自主防災組織も立ち上がってなくて、「学校がやってくれるんだったら、邪魔しないで協力するよ」と言ってくれるところもあれば、よく聞くのはまったく逆の地域も紀伊半島のあたりにはあります。地域の意識がすごく高く、「学校で防災教育やります」というと、「中途半端なことをしてくれるなよ」と地域から言われる。地域の方が学校の方に釘を刺して、「中途半端にやるくらいならやらない方がいいんだから、やるなよ」みたいなことを言う地域もあつたりします。

今日、釜石の方にも来ていただいておりますが、震災前に釜石東中学校で取り組みをしているときに、鶴住居という地域で「こども津波ひなんの家」という仕組みをつくる取り組みを、学校の先生たちと協力して始めようとなりました。内容は、登下校時に地震があったとき、小中学生が一人で逃げられない子がいた場合に、シールが貼ってあるところに駆け込めばそのうちの人と一緒に逃げてくれるという、「防犯 110 番の家」とまったく同じ仕組みです。「防犯」は駆け込んだら中で匿ってくれるだけですけど、「ひなんの家」は駆け込まれたおうちの人と一緒に逃げる、という仕組みです。この取り組みの目的は、実は釜石で防災教育を始めたきっかけとまったく一緒に、目指していたのは子どもの安全ではなく、それで地域の人を守ろうとしました。子どもはそんなことしなくても登下校中に地震があれば走って逃げます。それくらいしっかり学校で教育してくれていました。しかし、地域はそれに付いていってなかったんです。なので、この仕組みをいれることで、地域住民の避難を促すことにつながると考えていました。他所様の大事な子どもが自分の家に駆けこんできて、「一緒に逃げてください」と言われたら、駆け込まれた家の人には逃げざるを得ないですよ。そして、駆けこんできたときに「逃げない」と言わないことを引き受けてもらうための条件にしました。子どもは、学校で「揺れたら逃げる」という行動をちゃんと習慣化しようとしている。にもかかわらず、大人で「これは津波来ない」「逃げなくて大丈夫」と言われてしまうと、学校の防災教育の意味がなくなってしまう。そのため、子どもに駆け込まれたら、ちゃんと一緒に逃げてあげることを条件にしました。そして、そういう仕組みをつくろうと、地域の方に集まってもらって募集のお願いをする会をもちました。でも失敗しました。あまり地域の方に協力を得られませんでした。「そんなことしなくても、うちらは逃げる。群馬から来て、海もないところで生きているあんたらにはわからないかもしれないけれど、わしらには津波が来るときはわかるんだ」とはっきり言われました。震災の前のことです。それまで何年か連続で海沿いで津波注意報がでたりしても全然逃げない地域の方々に、そうはっきり言われました。「津波が来ないとわかっていたから逃げなかった、来るときはわかるんだから絶対逃げる」とはっきり言われました。このようになかなかうまくいかないってことがありました。

いま、こんなに熱心に防災教育をたくさん地域の学校でやっていただいております。本日、三重県尾鷲市、徳島県牟岐町からも来ていただいておりますが、この 2 市町についての話も紹介します。釜石でつくっていた防災教育の手引きが震災前の H21 年度末に完成しました。そこで、お付き合いのあるその 2 市町に「釜石でこんなものをつくったので、同じようなことを尾鷲市、牟岐町でもやりませんか」と持って行きました。しかし、ダメでした。教育委員会の担当者を口説き落とせませんでした。でも、さきほど榊谷先生がおっしゃったように震災後はコロッと手のひらを反して、みんなやりだしたという状況です。

別にその 2 市町が良いとか悪いとかではなく、また釜石のおっちゃんたちに恨みがあるわけではなく、地域と連携するときにはすごく大事だと思っていることとして、先ほど自分の失敗だとはっきり申し上げたのは、「どこまで思いを共有できていたのかな」というところで自分の反省があったんです。僕は自分の価値観や職務に対する倫理の中で、牟岐なら牟岐も、尾鷲なら尾鷲も近い将来津波が来るかもしれないと思って、同じことでも始めて、一歩防災を進めないとまずいんじゃないかなと思って、ご説明にあがったんですけど、残念ながらその思いが通じてなかったのかなと。各学校で地域と連携したり、保護者と連携して取り組みをすること

の重要性は、みんな誰でもわかっています。でも、なかなかうまくいかない経験が積み重なって、二の足踏んでいらっしゃる先生もやっぱり現場の中にはいらっしゃる。そうなったときに、もう一步背中を押せるのは“何をやれ”とか“こんなにいいことなんだ”というよりも、“地域をどうしたいか”“子どもたちをどうしたいんか”という思いの部分なんじゃないかなと思うんです。最初にその部分を共有できないと、どんなにいいことを言ってもその後はなかなか難しいと感じました。「連携大事ですよ」という前に、なぜ連携したいか、連携しようとしている学校側で、思い・目的・目標を共有するところが、まずは話を持って行くときに注意が必要なんだなというのを私個人としては実感しました。

それから、もう一点は、地域側のメリットっていう話をさせていただいたときに、川口館長さんが「年に一回新庄地震学の発表会があるので、あれで地域が引き締まる」というお話をいただきました。まさにその通りだなと思います。学校が連携できる地域の人は、保護者を含めて一部です。ごく一部なんです。学校とつながりがない地域の住民の方ってたくさんいらっしゃるんですけど、そういう人は防災に興味がないと、本当に何もきっかけがありません。地域で防災講演会をやったって参加するわけがないので。新庄もそうだったので嬉しいなと思ったんですけど、他の地域でも長く取り組みを継続しているところは、毎年同じことを同じ時期に地域を巻き込んでやっています。具体的な名前を出してしまって恐縮ですが、徳島市の津田中学校という、ぼうさい甲子園の常連校です。今日の会議にも「来てください」と担当の先生をお誘いしたんですが、「この時期は絶対ダメです」と簡単に断られました。理由は、毎年ちょうどこの時期に、津田地区の全住民に生徒が防災の聞き取り調査をしているそうなんです。先ほどの川口館長さんの話と同じように、地域の人は毎年お盆明けに、中学生が防災のことを聞き取りに来てくれると、「やっぱり注意しないといけないな」と思うわけです。学校の防災に関する行事が一年に一回の地域のイベントになっている、こういう連携の仕方もあるんじゃないかなと感じました。

川東 地域との連携を始めるという部分で、榊谷先生から震災が一つ大きな契機となったとのお話がありました。4年ほど経ちましたが、まだまだきっかけとしては可能性があるのではないかと思います。一方で、「じゃあ、やりましょう」と言って、必ずしもみんなが「うん」と言ってくれるわけではない。「地域を、子どもをどうしたいのか」そういう思いをどこまで共有して、「これがやりたいんです」ではなく、「どうしていききたいのか」という思いをどこまで共有できるかっていうところが地域との連携を始める一つのポイントではないかという話をいただきました。地域と学校が協力するメリットは、川口館長のお話にもあったように、「地域が子どもたちを待っている」という部分で、一年に一回であれ、そういったことが非常に重要なのではないかということでした。

地域との連携という話でパネリストの方からも話していただいているんですけど、参加されている皆さんの中からも地域との連携や協力というところできくつかお話を伺いたいと思います。新潟県見附市は内陸なので、津波ではなく、洪水の心配がある地域ですが、地域と協力した避難訓練を実施しているとのこと。取り組みの経緯やどのようなかたちで地域と連携したのかという部分について、見附市教育委員会から参加されている松井先生に伺いたいと思います。

松井 新潟県見附市教育委員会の松井です。もともとは小学校籍の教員です。勤めていた学校が中越地震でやられ、転勤したら今度は中越沖地震でやられてと、というような経験の中で、いまは行政の3年目です。いくつか取り組んでいることを報告させていただきます。



松井 謙太先生

一つ目は平成24年から文科省の指定を受けて、防災キャンプ事業というものを始めました。これは、財源確保ができたということが大きかったです。それから行政市長部局の応援の中で取り組んでいて、学校の方にやってくれとお願いしているような取り組みでして、24、25、26、27日と小中学校合わせて5学校でこの夏は実施しています。延べ10日間、学校に泊まってキャンプをしています。その中で2点頑張ったことは、一つはどのような学習プログラムが可能かという開発、もう一つはいろいろな学校外の人間とのつながり、コネをつくるということでした。地域住民や保護者はもちろんなんですが、行政も防災担当部局、教育委員会、消防、県や市の専門機関、有識者と言われるような人たち等々との関係性をつくって、今日拡大をしているというところでもあります。いずれマンネリ化すると思いますので、新鮮な継続ができるような知恵をいろいろな人たちから教えていただきたいと思っています。

二つ目は避難訓練です。それぞれの地域でも防災訓練は実施しているのではないかと思います。中学生はボランティアで自主的にこれに参加するという建前でやっています。10年前までは4~5人しか参加しない、何かの間違いで中学生も参加してしまった、というような数だったんですが、年々、参加率が向上しています。小学校でやっている防災教育の影響であれば一つの成果かなとも思います。東日本大震災をまたいで数が増えていますので、世の中の動きも関係しているのかなと思います。去年70%を超えて、これ以上参加率が増えたらどうしようかなと。いずれ下がると思っていたら、今年83%になりました。それらの子どもたちが、それぞれの町内の訓練、全体の訓練に参加して、真顔で訓練している大人たちの姿を見て、自分も何かの役割を振っていただいて、その中で活動しています。冒頭、市長さんが人口減少の話に少し触れられましたけれど、2040年くらいになるとうちの町もかなり減りまして、1万人くらい減る見込みがあります。しかも高齢化してきます。賢くてタフで地域を愛する担い手として、中学生がしっかり育ってもらいたいというのは、みんなの願いだと思っています。完全に参加するメンバーの思いが共有化されているかわかりませんが、まずは型を求めて、型からでるところなのかなと思います。

三つ目は、見附市はコミュニティスクール、学校運営協議会を全ての学校に置いているんですけど、その中で学校安全部会などを設けている学校もあります。それは登下校の生活安全だけではなく、子どもたちの防災教育をサポートするメンバーというかたちで学校の教育課程の中でレギュラーな人たちでお願いしています。これまでの教育コーディネーターだとか、学校支援地域本部事業だとか、そういったもので、長年取り組んできて、ソーシャルキャピタルがかなり高まってきているという背景があるのかなと思っています。協力的な人もそうでない人もいるわけですが、つながれるところからつながってお力をいただいているという状況です。

川東 ここまでは、防災教育を継続するために、学校としてそういった仕組みが必要であろうという話、さらにはその効果を高めるということを含めて地域と協力する、地域と連携していくといった話を続けてきました。

ここで、学校として仕組みをつくり、地域と連携して防災教育としての効果を高めていくことで、児童・生徒に対する教育効果は防災上だけのものではなく、やはりさらなる相乗効果があるのではないかと思います。これまでの話の中でもいくつか出てきておりますが、そういった点についてもお伺いしていきたいと思います。最初に小川先生にお伺いしたいのですが、小木中学校の実践を通じて、生徒たちの成長を実感された瞬間はどんなことでしたか。

小川 私が感じた成長として、生徒たちに例えばマイク一つ向けても堂々と喋れるようになっている。それから、「自分たちのやっていることが、社会の皆さん、地域の皆さんから受け入れられている」という手ごたえ感を感じている生徒たちは、主体的に考えたり、行動するような兆しが見えてきている。そういったことを通じて、自分たちがその地域に元気を与えている、その一翼を担っているということを肌で感じられるようになってきているのかなと。そのことが特に過疎地域では、単なる防災教育ということではなくて、防災という取り組みを通して、地域の活性化に多大な貢献をするのではないかなと感じています。実は、新庄中学校での取り組みをまったく知らずに、小木中学校もカルタ、ダンス、このあたりをやっています。「せっかくやるなら歌と振付け作れ」と始めたことが、少し発展して防災体操となりました。それから社会科の教員が発案したカルタが、地域の社会福祉協議会の皆さんに見ていただきまして、地域に配布することになりました。実際に担当した教員が会議に来ておりますので話を振ります。

廣澤 子どもたちの変化・変容というところで、防災以外にいちばん大きいのは、子どもたちにコミュニケーション能力を育てたいというのが、私たち教員の一番の思いです。防災教育として、「避難訓練をする」ことを学校の一番の目標にしていました。なるべくたくさんの人に避難訓練に参加してもらいたい。そのためにはどんなことが必要かということから、学校でできることを考えていった、というのが小木中学校の流れです。その中で、ちっちゃい町なので、お年寄りが地域の中に日中はおいでになる。それから保育園児。そういう人たちと親しくなっていけば、避難訓練にたくさん人が来てくれるんじゃないかと考えていったんです。そうすると、必要なのは、普段からいろいろ一緒に活動したり、仲良くなったりする活動です。その中で、防災体操や、カルタづくりをやったりすると、お年寄りとも保育園児ともコミュニケーションとれる。次に防災体操を考えると自分たちだけじゃ難しいので、何かアドバイスしてくれる人がいないかなと考えたときに、ボランティア活動をしている大学生を紹介してもらい、大学生と一緒に防災体操というものを考えていきました。防災体操というのは、お年寄りの人たちが防災の歌を歌いながら体操していくと自然と防災のいろんなものが身に付くというもの



廣澤 孝俊先生



大句 わか子先生

です。そういうものをつくることによって、大学生ともコミュニケーションがとれるようになる。このように、この防災の活動を通していちばん大きかったことは、いろいろな年代の人たちとコミュニケーションをとる機会があり、なおかつコミュニケーションがとれる力を子どもたちがつけていったというところをすごく手ごたえとして感じています。

大句 現小木中学校の校長の大句といいます。パネリストとして喋っている小川校長は隣の市へ異動しました。いま、喋っていた廣澤先生は学校をけん引してくれていましたが、これまた一つ隣の町に異動しました。わたしは、元は教頭として小木中学校にいたのですが、昨年戻ってくるという縁をいただきまして、いま小木中学校の校長をしています。私になってからは、自分たちからもやっていきたいのはやまやまなんですけど、けん引していた者たちがいなくなったことにより、どうつないでいくかが私の役目だなと感じていました。しかし、まわりの方からオファーがくることがあります。先ほどの廣澤先生が大型紙芝居をつくったんですけれど、それをご覧になった町の社協の方が「防災カルタを作成したい」と言ってきました。私がお願いしたのではなく、「200組つくって、地域のコミュニティ広場とか、お年寄りが集まる場所、保育園などに配って、そこで使ってもらって防災意識を高めればいいんじゃないか」と社協の方がおっしゃいました。また、子どもたちに、石川県七尾市の方から、「どうして小木中学校が防災教育が始めて、どんな効果があったのは話してほしい」「防災体操をやってくれ」「大型紙芝居をやってくれ」というオファーが来ました。そこで子どもたちに「校長と一緒に夏休みだけど、土曜日だけ行ってくれる人」と言うと、15人ほど「一緒に行っていよいよ」と言ってくれます。「そこへ行って発表しなければいけないんだよ、体操するんだよ」と言うと、「わかったよ」という感じで、私は子どもたちに助けられています。子どもたちはちょっと練習するだけで、「ここはこうしよう」ということが出来ますし、急なことが入っても、「わかりました」の一言で了解してくれます。最後に自分の発表が終わりますと、原稿を閉じてみんなの方を見て、「ご清聴ありがとうございました」と言える中学生になっていて、自分は途中2年間抜けているんですけれど、びっくりしています。小木中学校の防災教育の取り組みは5年目なのですが、「防災ばっかりして、何をしている学校なんだ」と言われました。わたしも他の中学校にいるときは、「そうかな」と思っていたんですが、離れてみて、「子どもたちが生き生きしている」、「子どもたちが人前へ出てもおどおどしない」、そして、「講演会で話をしてもらっている人を見ている他の中学生の態度が悪い」とか「あの人が寝ていて失礼です」と私に怒ってくるんです。けれど、「じゃあ、あなたそれだけちゃんとやれるの?」と思うと、自分たちは姿勢を正し、講演を聞き聞いていました。そして不思議なことに、家庭の学習時間も延びています。私は戻ってきて、いいところをいただいていると感じています。そういうふうになり自己達成感というか、子どもたち自身も「自分もちゃんとしなきゃ」というふうになってきていて、効果のほどを目の当たりにしています。ただ、反対に教員の方で、ちょっとだらしないというか、あまり熱心じゃなかったりするとすぐに見抜かれてしまうという怖さが出てきております。他の教職員も子どもたちに負けずにやっていかなければいけない、アンテナ張らなければいけない、というところが課題かなと思っています。

避難訓練も最初は300名、私が出てしまっただけからは800名、700名、650名と地域の皆さんが集まってきてくださいます。そこで、中学生が体操なり、カルタなり、他の取り組みを紹介させてもらう場を設けさせていただいています。今年は9月27日に、町の総合防災訓練の会

場に本校がなります。町には四つの中学校があるんですけど、何とか他校とも少しずつ連携しながらできないかなと思っています。これはまだ取り掛かりなんですけど、そういう状況になってきて、協力の大きさもいま、非常に感じているところです。

川東 廣澤先生からは、防災教育を通して地域と連携することによって生徒たちが生き生きとコミュニケーションをとれるようになってきているというお話でした。大句先生の方からは、そういった流れが出来ていく中で、ご自身も頑張ろうとされたんだと思いますが、頑張らなくてもまわりからオファーが来て、頑張ってもやらなくてもできるような体制ができてきている。それが良い相乗効果を生みつつも、今度新たな問題として、生徒はいいけれど、学校の先生がという悩ましい問題が出てきているというような話をいただきました。

榊谷先生は、新庄地震学を通じて実際生徒たちの成長を実感された瞬間、もうすでにお話している部分もあるかと思いますが、他に何かありましたらご紹介いただければと思います。

榊谷 「学力向上」と、谷本先生も私も言いたいんですけど、頑張る子は頑張ってくれるんですけど、正直言いまして、なかなかもうひとつです。防災授業をやっているときは、喜んでやってくれるんですけど、そういうときになったら難しい顔をして座っています。先ほども言いましたけれど、格好いい言い方をすれば、大人の方と堂々と話し合える、中学生にしてはすごいなという、人間力が高まるというかそういったのは感じています。

谷本 挨拶とかはしっかり出来るようになってきたんじゃないかなと思います。学校自体が地域の方の通り道というか、抜け道になっているんですね。それなので、地域の方がよく通るんですけど、「挨拶をよくしてくれる」、「生徒の方から声かけてくれる」という声徐徐に増えてきたんじゃないかなという気持ちがあります。防災のところでは、私は陸上部の顧問をしているんですけど、陸上の大会に行ったりしたら、「先生、ここでも津波が来たらどこへ逃げたらいいんだろう」や遠足や校外学習へ行くバスの中で「ここで地震が来たら、先生、あそこだったらあかん」ということをちらほら言ってきたりします。また、去年の卒業生ですけど、地震学をやってきて、「助けられる側より私は助ける側になりたい」と言って、「将来私は救命救急士を目指したい」と言ってくれた子もいました。

川東 川口館長にもお伺いしたいのですが、逆に生徒と交流する中で、まさに地域の一員として見たときに生徒たちの成長を感じたことって何かありますか。

川口 私はしょっちゅう子どもたちを見ているわけではないんですが、今日の発表してくれている生徒さんたちを見ていると、「しっかりしてきたな」と思います。つねに見ていないから余計にわかるのかもしれませんが、同じ子が1.2.3年と育っていくのが、主にこういう発表の場ですが、かなりよく実感できます。

川東 パネリストの皆さんから、実際地域と連携することで防災教育上の効果だけではなく、その他の効果もあるのではないのかということでお話いただきました。フロアの方からもご経験やご意見もらえればと思います。高知県の城西中学校の三浦先生は前任校の潮江中学校、昔の小木中学校のようだと聞いております。そこで様々な取り組みをされていたようですが、地域の連携と効果についてお伺いしたいです。

三浦 高知県から来ました三浦と申します。今年は落ち着いた学校に行かせてもらって、その前までは9年間、高知県で一番しんどい学校に赴任させていただきました。東日本大震災が起こったあと校長先生が代わられて本格的に防災教育を目指していきました。その中で、4年間勉強させ

てもらい、また僕なりに大学院でも研究したんですけど、防災というのは学校と地域をつなぐテーマだと考えています。日本は災害の多い国であって、どこにあっても防災というのは、地域とつないでくれる共通のテーマだと考えています。学校における防災教育で、生徒や子供がしっかりした知識や行動力を身につけることによって防災力があがる。そのことが今後、南海地震とかにいかされていくと考えています。



三浦 洋志先生

地域とどのように学校をつないでいくかというので、僕が実践したのは、生徒を地域にどんどん出していく、地域の行事にどんどん参加していくことを繰り返しやってきました。年間を通して、小学校・保育園の交流を中学生が主体になって出かけていきました。その結果、10年前は苦情しか来なかった学校の中学生に「参加してください」や、小学校が3校あるんですけど、「中学生と先生と一緒に授業に来てください」という依頼がくるようになりました。賞をもらうためにやっているわけではないですけど、まちづくり防災大賞とかで総務大臣賞とかをもらうことができました。やはり東日本大震災を経験した学校で学ぶことが一番良いだろうということで、東北へ視察にも行きました。コミュニティスクールの存在によって、地域と学校が一緒になって学校運営をしていくこと、最終的にはそのかたちがいまの教育にいいんじゃないかなと思っています。災害時、学校があるときには教員がしっかり守っていくんですけど、学校がないときにはやはり地域の人たちが中心になってやる。そういう勉強をしてきました。

今日はいろんな地域の取り組みを知り、また新庄中学校が15年間継続してきたことがいいことだと思います。南海地震までそれを継続していくことが、これからの課題であると思います。いま、東北の方では検証にあたっていると思います。いままでの東北の防災教育が本当に良かったのか、悪かった点がどうなのかを検証していつている時期であって、西日本では次の南海地震までは防災教育を継続していくことが大切だと思っています。そこで、次の南海地震が起こったあと、どのように検証していくかが今後の日本の防災教育かなと思っています。

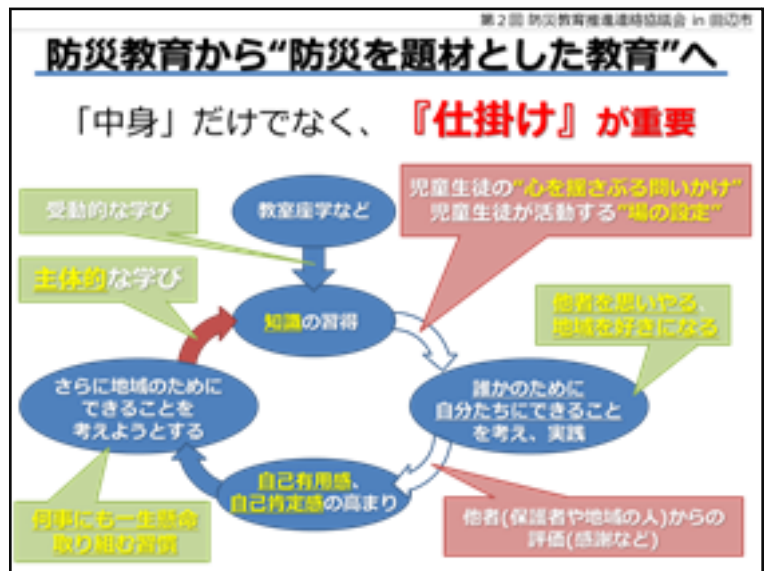
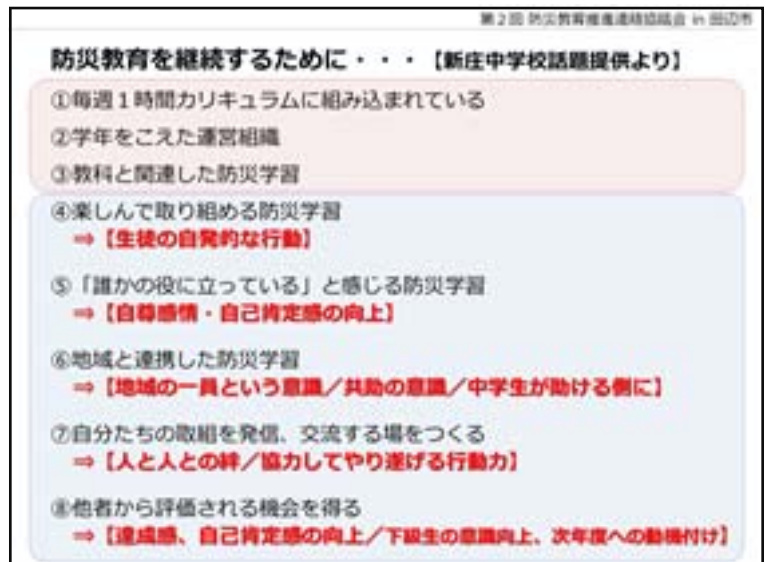
金井

前回、釜石で会議をしたときにも、ちょっと紹介させてもらったかと思うんですけど、片田先生と一緒に、全国の小中学校を対象に防災教育の実施状況を調査させてもらいました。ざっくりばらんに言うならば、よくやるようになりました、すべての地域で避難訓練を。たくさんやるようになっています。授業も防災でよく言われるような知識を与える、防災の基礎的な知識を教える授業というの、たくさん地域でやるようになっていることが明確に見えてきたんです。それはそうだと思うんです。いろんな地域に行ってお話きいてきた肌感覚としても、全然間違っていないと思っていたんです。その中で僕らが調査する中で一番注目していたのは、「防災教育をやっていて、子どもたちにどんな変化がありましたか」という広い意味での防災教育の実施効果に関する質問の回答です。多くの学校で「防災意識が高まりました」「いざというときには逃げるといふ姿勢が身に付きました」という効果は見られた回答していましたが、これは防災教育をしていて、そのような効果が感じられなかったらむしろ問題ですよ。それ以外のところで、先ほど何度もお話していただいているような「主体的に物事を考えるように

なった」「コミュニケーション能力が高くなった」、小木中学校のように「学力があがってきた」なんて事例も挙げてくれる学校もいくつか出てきていました。またアンケートの中にフリーアンサーで「具体的にどんなことが効果でありましたか」と聞くと、すごく良いことが書いてある学校がいくつかあったんです。その中の一つが先ほどご発言いただいた高知市の潮江中学校でした。なので、ぜひともということで異動されているのですが、担当者だった三浦先生に参加のお願いをしました。

小木中学校や新庄中学校のように、いくつかのすごく熱心に頑張っているいろいろな成果をあげていらっしゃる学校見ていると、防災教育の効果を広く捉えているなど感じます。「他者のことを思いやる」とか、自分だったり家族だったり、地域の人の「命を大切にする気持ち」とか、防災は地域の問題ですので、「地域を愛する気持ち」も高まります。「郷土愛」などは調べ学習の時間等でテーマにすることが多いと思います。防災をやっているだけでも、それと同じくらいそういう気持ちも高まって、成果がでてきたりしていると思います。

それを絵にしてみました。新庄の取り組みの紹介で、谷本先生に「防災教育を継続するための8つのポイント」を挙げていただきましたが、事前に資料を見させていただいて、明確に二つに分かれるなと思いました。①毎週1時間のカリキュラムに組み込まれている、②学年をこえた運営組織、③教科と関連した防災学習、この三つは“仕組み”です。学校でうまくまわすために仕組みをつくりましょうという組織論の話かと思います。④楽しんで取り組める防災学習、⑤「誰かの役に立っている」と感じる防災学習、⑥地域と連携した防災学習、⑦自分たちの取組を発信、交流する場をつくる、⑧他者から評価される機会を得る、この五つは一つひとつの実践を行うときに、担当の先生方が注意して仕込むべき“仕掛け”です。楽しんでやらないと生徒の自由な発想、主体的な行動は出てこないというのはまったくその通りだと思います。誰かの役に立っていると感じられるからこそ、自分の存在価値に気づき、自己肯定感が高まる。それを感じるために重要なのは、自分たちがやっていることを発信する場、この場合でいうと



⑦です。そういうものを仕掛けとしてつくってあげないとなかなかそれを感じることができない。新庄中学校の場合はそれを発表会というかたちで仕組みにしていたんだと思います。そういう場を通して、他者から評価してもらえる。評価についても発表会をするだけではダメで、そこに参加した地域の方だったり、保護者の方が「お前らいいことやった」「がんばったな」と褒めてもらう。ただ発表するだけではなくて、その一言を言ってもらえるかどうか、地域からのポジティブな反応を引き出してもらうためにも、地域・家庭との連携というのは重要なかなと思います。こうやって谷本先生の資料をみていくと、地域と連携してうまく取り組みをまわしていったときに、その効果を最大限発揮し、良いとこどりできるようなポイントがここに集約されているのではないかなと思いました。

パネルディスカッション 1 でも、「知識を与えるだけではなくて、いざというときに、自分で判断して行動できる子どもにするためにはどうしたらいいか。そのための教える側、教員側のコミュニケーションの素質ってどういうものが必要か」という話をさせてもらいました。それも合わせて、継続するためには、防災教育をやっていて「これはやっていて意味あるな」、「やることに効果があるな」と実感する成功体験がないと、なかなか続かないと思います。その意味でも、一つひとつの実践について、効果を最大限発揮するための“仕掛け”が重要なのでは、と皆さんの話を聞いて感じました。

川口 学校の外から学校を見ていますと、ちょっと面白いことが見えてきます。授業参観なんかは保護者の参加率もいまひとつだということを知りますが、新庄中学校の場合は、他所の学校をたくさん知っているわけではないですが、体育祭に保護者や大人が結構多いです。それはなんでだろうかと思うことがあったんです。やはり子どもと地域がつながっているんです。例えば中学生が地域のお祭りに出しものをだしてくれます。それだけでなく、あとの掃除までしてくれる。そんな子どもたちに親しみを感じるのは当たり前ですね。それから地域側も公民館を始め、年間、相当たくさん学校へ入っていきます。獅子舞を教えにいたり、ジオパークの会員は地域の学校の近くの地層を教えてまわったりしているんですね。相当いろんなことの交流の結果が体育祭にあらわれているのかなと感じました。

川東 まさにいまのお話でもそうで、体育祭などのイベントを通して交流する仕組みがあることで地域と子どもたちを含めた連携が生まれているのかと思います。金井先生の話もつまるころ、学校の中の防災教育という“仕組み”も重要ですし、地域とつながるという意味での何らかの“仕組み”も必要です。ただ、“仕組み”だけあってもダメで、そこから教育上の効果をあげるためには“仕掛け”が必要であり、さらには我々全員がその効果を実感できることが必要になります。その結果として、実践が継続していき、地域との連携が効果をうむということにつながるのではないのでしょうか。

以上